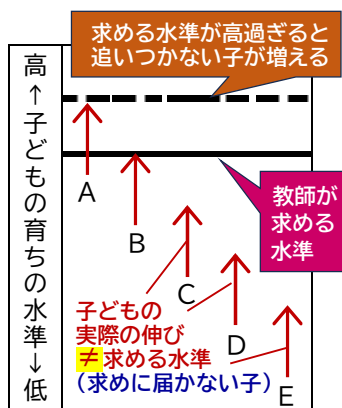




教師が子どもに求める姿って…

学級担任の皆さんは、目の前の子どもたちにどんな子(たち)であって欲しい、どんな子(たち)になって欲しいですか。学校・学年の教育目標や経営方針を念頭に、担任の先生はご自分の考えや願いなどを子どもたちに語られたことと思います。各学級で、子どもたちが話し合いによって立てる学級目標に、教師の思いが反映されるといいですね。子どもと教師が同じ方向を向いて、折に触れて確認しながら、成果・成長や課題を共有していきたいものです。

ただ、何事に対しても学級の全員が同じ意識で足並みを揃えて…との思いが強過ぎるとしたら、その思いはリスクでもあります。子ども一人一人の特性・育ちの状況の違いを前提に、学級集団としては何をどこまで目指し、求めていくのかを考える必要があります。



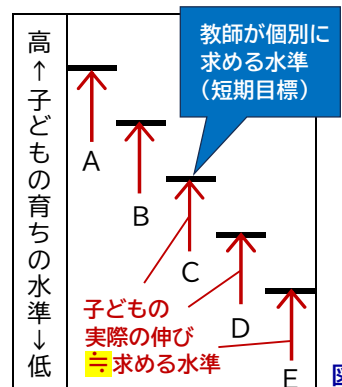
教師が子どもに求める水準（学力や生活態度など）を、図の太線で表した場合、今年度担任する子の中には、教師の願いを実現に導いてくれそうな“手のかからない、しっかりした子”（図のAさんやBさん）もいれば、“何かと手がかかる、課題の多い子”（DさんやEさん）もいます。

どんな子が何人いるのかによって、「よし、今年は行けるぞ」と心が弾む年もあるれば、「今年は苦労しそうだ」と気が引き締まる（重くなる？）年もあるのではないかと思います。多かれ少なかれ、教師の意図に反する行動が目につく子はいるものです。

学級を外側から見ると、そうした子がない学級が良い学級であり、学級経営の力量に優れた担任教師と思われがちですが、果たしてそうでしょうか。そういう子がいる中でも、一つ一つ課題を乗り越えながら、皆が学級に愛着をもって育っていく学級こそが良い学級、そして、苦戦しながらも前向きで創意工夫に満ち、澁澁としている教師こそが、子どもたちにとって行動や考え方の良い手本になり得ると思うのですが、皆さんはどう思いますか？

※ 前提となるのは教師間の協力関係であり、職員室の良い雰囲気ですね。

逆に、学年としてのあるべき姿（水準）を全ての子に対して求めることは、子どもや教師自身を追い詰めかねません。「どうしてできないの！」「何で分からないの！」「この子さえいなければ…」そんなネガティブな思考や感情は、いくら取り繕っても、言葉の端々や語調、顔に表れ、当該の子に伝わるばかりか、取り巻く子どもたちの間に“異質なものは制裁する、排除していい”という、いじめ行為を正当化しかねない誤った価値観を植え付けてしまうことになります。



いろんな子がいて、手のかかる子もいる、それが学級の自然な姿です。現況をスタートラインとして受け止め（スタート時点からマイナスだと悲観せずに）、学級目標のような集団目標と並行して、個々の育ちの水準に合わせた“次に目指す姿”（個別の指導計画における短期目標、半年後を見据えたもの）を思い描きながら指導に望みたいものです。それは、個別の指導計画の作成を要しない子であってもです。

図はイメージです

担当：学校生活適応支援アドバイザー 飯山・大瀧
TEL 639-4392 / 支援要請は 639-4381 諸伏・石川